

令和5年度 沖縄県立芸術大学教育研究支援資金事業報告書

屋比久 理夏¹⁾

《研究課題》

沖縄県における管打楽器早期音楽教育プログラム導入への研究（2）

1. 研究概要

令和4年度の調査等で把握した沖縄県の管打楽器教育の現状を踏まえて、令和5年度も中学1、2年生を対象とした個人実技レッスンを行い、管打楽器の早期教育プログラムの導入へ向けて研究を行った。

7つの楽器種（フルート、クラリネット、サクソフォーン、ホルン、トランペット、トロンボーン、打楽器）について受講生の募集をし、応募者32名の中から、動画審査により、フルート2名、クラリネット3名、サクソフォーン2名、ホルン1名、トランペット3名、トロンボーン2名、打楽器3名の計16名を選出した。受講生の居住地は那覇市、八重瀬町、沖縄市、北谷町、中城村であった。

指導は、小師華那（フルート、大学院2年）、澤村康恵（クラリネット、教授）、屋良久美子（サクソフォーン、非常勤講師）、阿部雅人（ホルン、教授）、倉橋健（トランペット、教授）、又吉智教（トロンボーン、非常勤講師）、打楽器は筆者が担当した。今回は講師に大学院生と非常勤講師を加え、昨年度より多角的な検証を試みた。

令和5年8月下旬より講師が各中学校へ赴き、1回30～40分の個人レッスン（おでかけレッスン）を以下のような流れで5回行った。なお、それぞれの指導の間隔は1ヶ月から1ヶ月半である。

指導1回目	受講生の現状把握（アンケートと聞き取り）、楽器演奏の基礎技術の指導と基礎練習の提案
指導2回目	基礎練習の定着と演奏技術の向上を見る。状態に応じて基礎技術についてアドバイス
指導3回目	基礎技術の確認。受講生の状態に応じ、独奏曲の選択。譜読みの方法や、楽譜に示されている演奏方法などの指導
指導4回目	基礎技術の確認。曲の完成へ向けて進捗程度を確認。練習方法のアドバイスや曲の解釈などを伝える
指導5回目	曲の仕上げ。表現力を向上させるための指導を行う。

1) 沖縄県立芸術大学

2. 研究期間

令和5年5月1日～令和6年3月10日

3. 研究成果

令和4年度の研究が吹奏楽指導者や中学校教員へ認知されたこともあり、令和5年度の応募者は前年より倍増した。今回選出されなかった応募者も、それぞれに専門家からの指導を希望していたことから、管打楽器の演奏について興味や向上心を持つ生徒が増えてきた事が伺えた。また、今回選出された生徒の中には、楽器を始めてから1～2年ではあるものの、すでに地域の音楽教室や、一般社団法人C→Brass ウインドオーケストラ¹が行う若手育成プログラムでレッスンを受けている生徒もいる一方、YouTubeを見て最初から独学で学んでいる生徒や、部員が少ないため自己流で音を出している生徒など、さまざまな境遇の生徒がいた。

今回、中学生という多感な時期の子供と対峙するにあたり、講師には技術面だけではなく心身の状態についても観察しながら適切にアドバイスをしていただいた。成果発表コンサート後のアンケートには、受講生全員が「自信を持った」「もっと上手になりたいと思った」と前向きなコメントを記載していることから、今回のおでかけレッスンが彼らの成長の一助となったことは明らかである。特に中学生は心身の成長、安定と演奏技術の向上は密接に繋がっていると感じた。

今回受講した生徒たちは令和6年度の吹奏楽コンクールでも大変良い演奏をしており、演奏技術の向上をきっかけに、受講生たちが周りの生徒を牽引し好影響を与えていると各中学校の教員より報告があった。

今回の早期教育プログラムの講師が実際に指導を行ったのは5回とそれほど多くないが、やはり管打楽器演奏の初期の段階に専門家の指導を受けることは、かなり有益であることが分かった。

4. 検証・考察

中学1、2年生を対象にしたことについては、沖縄県の現状から見ると適切であったように思う。ただ、わずかではあるが小学校でも吹奏楽の活動を行っている学校があることから、今後、個人的に当該の小学校へ訪問しヒアリングを行いたい。

令和4年度の研究でも、読譜力とソルフェージュ能力の違いが管打楽器の演奏技術の上達速度に影響があるという考察を述べたが、今回の受講生についてもその傾向は顕著であった。

中学校入学以前にピアノ演奏や他の機会で楽譜に触れてきている生徒は、自分で譜読み

をし、練習を進めていくことが可能だが、そうでない生徒は譜読みに大幅な時間を費やすことになった。一方で、幼少期からピアノを学習してきた生徒が中学生で移調楽器を始めると、記譜と実音が異なることに違和感を感じ、混乱するという事例にも遭遇した。

読譜力やソルフェージュ力は演奏する上で欠かせない能力であるが、いい音、いい素質を持っていたとしても楽譜や音感に慣れる事ができず、難しいと感じ、途中でやめてしまう生徒も多いのではないかと感じた。

今回の受講生から見える沖縄県の中学生の現状として、学校外の習い事や子供の学習の機会については家庭の経済状況等が背景にあること、また子供たち自身も忙しく、個人練習の時間や演奏会などに行く時間を確保することが難しいことも浮き彫りになった。音楽的な体験にはかなり個人差があると思われる。

そして、特筆すべきこととして今回は大学院生も指導を行ったが、大学院生は中学生と年齢も近い事もあり、比較的早く受講生と打ち解ける事ができていた。講師自身も指導を通して自身の奏法や指導法を考える契機となっており、受講生に寄り添い、試行錯誤しながらのレッスンは受講生、講師ともに各々の演奏を高める効果があったと考える。

コロナ禍で打撃を受けた管打楽器教育ではあるが、本研究で小中高校の教員や指導者、保護者の努力で復興し始めていることを実感できた。今こそ本学の果たす役割は大きいと考える。

5. 展望

2年間の研究を通し、管打楽器教育のさまざまな課題を突きつけられた。

まずは、読譜力の育成である。子供たちは楽譜を目の前にすると「難しい」という印象が先行してしまい、近年は動画などでいわゆる耳コピーをし、演奏することが多くなっている。読譜へのハードルを下げ、無理なく段階的に楽譜が読めるようになるシステムや教材の開発が急務である。

さらに、ソルフェージュ能力についても引き上げる必要があるが、今回の研究で、まず打楽器でリズムを演奏しながら読譜力を身につけ、その次の段階として階名がある管楽器や歌唱へ繋げる指導を行うと、効率よく読譜力とソルフェージュ能力を身につけることができるのではないかと推測できたため、今後は管打楽器早期教育プログラムの開発の一部として小学生を対象にした音楽教育プログラムの開発を行いたい。そして、そのプログラムは誰でも公平に演奏を楽しむ機会が与えられるよう、学校教育の中で行うべきだと現在は考えている。教育課程の中で音楽教育プログラムを展開できないか、各研究機関、小学校や中学校と連携し研究を続けたいと考える。

課題はまだある。中学校が所有する楽器の状態が悪くなく、修理や購入する予算もない

という。子供たちは努力しているが、楽器の状態の悪さが成長を阻んでいるケースも多い。楽器の値段も高騰していることもあるが、管理やメンテナンスなどについての知識が乏しいことも原因の一つであることから、各所に働きかけて啓発を行いたい。

最後にもう一点、指導者の不足も大きな課題だと思われる。中学校の吹奏楽部では多くの管打楽器を扱うが、顧問だけではそれぞれの楽器に対し演奏指導が十分に行えない場合もある。楽器を始めるタイミングで専門家に習う事ができれば、バンド全体の演奏技術も上がってくると思われる。この点については、本学で良き指導者となる人材を育てると共に、沖縄県吹奏楽連盟や他の団体とも協力し、指導の方法や仕組みを整えていきたい。

註1：沖縄の文化発展、子供の教育、若手音楽家の活動の場の創出を目的に2021年に音楽大学出身者で結成された吹奏楽団。2023年3月より一般社団法人へ移行。